



100周年に向けて学会の力の結集を

第10代会長 児玉 徹



この度、日本生物工学会が創立90周年を迎えられましたことを、その一時期に執行部を務めたものの一人として大変嬉しく、また光栄に存じます。

あの甚大な被害を齎した阪神・淡路大震災が発生して4カ月余、その余韻も治まらない時期に永井前会長から本学会を引き継ぎ、無我夢中で2年間の任期を過ごして早や15年になります。関東圏からの初めての会長ということで勝手が分からず、役員の方々に大いにご迷惑をおかけしたように思います。何か新機軸を打ち出したいと思いながら、東京大学の定年と信州大学での新たな研究室開設時期と重なったため、時間ばかりが経過した焦燥の日々も今では懐かしく思い出されます。

そんな中で、その後の学会運営に多少の貢献ができたとすれば、会長および副会長の任期をそれぞれ2年間として重任を行わない制度を確立したことと、大きな勢力となった東日本支部から北日本支部を独立する端緒を開いたことくらいでしょうか。前会長までは最短でも4年間の任期を務められ、それはそれでメリットはあったと思いますが、全国的に周りを見回せば以前とは異なり、若い優秀な人材が輩出しており、会長候補に事欠かない状況と判断されましたので、思い切って会長任期を1期2年限りとすることにしました。ただ自分の経験から、いきなり会長に就任しますと、何かを決定するには時間が足りないことが懸念されましたので、副会長の一人を次期会長候補として選出しておき、新機軸を出すべき準備期間を担保する制度としました。この方式は、以後8代にわたって定着しており嬉しい限りです。

一方、巨大化した東日本支部から分離して北日本支部を開設する構想には就任当初から取りかかり、鋭意進めたつもりでしたが、2年間ではどうしても手続的に時間が足りず、私の任期中には実現できずに次期に引き継ぐことになりました。しかし、北大の富田先生を中心とす

る方々の献身的なご尽力により、小林次期会長のもとで任期早々に設立されるに至り、これにより学会が全国規模で大きく発展する一助になったと信じております。

さて、これから若手生物工学研究者へのメッセージをというご依頼を受けましたが、現役を退いてすでに十数年を経た身としては大変荷が重い感じです。

あの年に一度ともいわれる巨大な東北地方太平洋沖地震発生の直後に出来られた本学会会誌一昨年3月号の「隨縁隨意」欄に書かせて頂いたことですが、わが学会に所属する研究者の多くは何らかの形でバイオマスの活用に関わりがあると思います。

「隨縁隨意」の拙文は大地震が発生することなど露知らず書いたものですが、大地震に加えて原発の爆発事故という未曾有の大災害が起こったことにより、再生可能なエネルギーの一翼を担うものとして、原発依存からの脱却、また地球温暖化抑止のための方策の一つとして、バイオマスが持続可能な循環型社会の構築のために、ますます重要性を増したことは周知の通りです。

しかし、バイオマスが普遍的に分布しているにも拘らず、その活用の事業化が進まない理由としては採算性の確保ができなかったこと、製品利用の停滞、人材不足などが挙げられます。幸い昨年7月に電力固定価格買取制度（FIT）が導入されたことによりバイオマス発電の機運が盛り上がってきたところであり、出口戦略を見据えた活用へと見直されつつある状況です。ここでバイオマス活用の技術的プロセスとして重要な微生物機能についての専門家集団である本学会会員諸氏の知力が結集されれば、政府の目標としている約10年後の5000億円規模のバイオマス産業の創出は必ずや達成され、原発ゼロにも貢献できると信じております。学会会員としての皆様の力の結集を期待して止みません。